# 五音節名詞の東京方言アクセント

柳田征司

目次

一、問題の所在
二、院政・鎌倉時代における京都方言の型と現代東京方言の形
三、東京アクセントの成立
(一)第一類Ⅰ・第二類Ⅳ・第三類Ⅱ
(二)第二類Ⅵ・第九類Ⅰ・第一三類Ⅴ・第一四類Ⅵ・第一五類Ⅵと第一類Ⅲ・第七類Ⅳ・第一二類Ⅳ・第一三類Ⅳ・第一五類Ⅰ
(三)その他
(四)語頭の低下
四、○●●●●」・●○○○○
五、結論

## 一、問題の所在

筆者は、先に、東京方言において、音便の定着が原因となって、動詞に生じたアクセント変化が、名詞に及んだ様子を、一音節名詞から四音節名詞について見て来た。[1] ここでは、東京方言の五音節名詞のアクセントが、どのようにして

院政・鎌倉時代の京阪アクセントの形から生まれたのかを見ることとしたい。ここで特徴的であるのは、一音節名詞から四音節名詞については、動詞に生じたアクセント変化、

(1)○●▽→●○▽（二音節第二類動詞連用形＋テ、例、書イテ）

(2)○○●▽→○●○▽（三音節第二類動詞連用形＋テ、例、動イテ）

(3)○●→●○（二音節第二類動詞終止形、例、書ク）

(4)○○●→○●○（三音節第二類動詞終止形、例、動ク）

が、名詞に及んで行ったと見られるのに対して、五音節名詞の場合にはそのような力が及ばないということである。

## 二、院政・鎌倉時代における京都方言の型と現代東京方言の形

四音節名詞について調査したのと同様の手続きで、院政・鎌倉時代の京都の五音節名詞のアクセントの型を整理し、それが現代東京方言の形とどのように対応しているかを調べると、表1のようになっている。(2)

（表1）

| | 院政・鎌倉 | 現代東京 | 語数（語例） |
|---|---|---|---|
| 第一類 I | ●●●●● | ○●●●● | 五語（例、ウツハモノ（器）） |
| II | ●●●●● | ○●●●○ | 一語（波太於利米（促織）） |
| III | ●●●●● | ○●●○○ | 四語（例、キナカビト（田舎児）） |
| 第二類 | ●●●●○ | | |

| | | |
|---|---|---|
| I | ●●●●● | 一語（ヒタヒビロ（揚）） |
| II | ●●●●○ | 一語（みをづくし（澪標）） |
| III | ●●●●○ | 二語（例、イシダタミ（烟）） |
| IV | ●●●●○ | 三語（例、和太之布祢（瀆）） |
| V | ●●●●○ | 一語（ゆふづくよ（夕月夜）） |
| VI | ●●●●○ | 四四語（例、サキバラヒ（前駈）） |
| 第三類 | | |
| I | ●●●●○ | 一語（タケノカハ（篋）） |
| II | ●●●○○ | 七語（例、イハシミヅ（石清水）） |
| III | ●●●○○ | 一語（ミヅクロヒ（法用）） |
| 第四類 | | |
| I | ●●○○○ | 二語（例、ますかがみ（真澄鏡）） |
| 第五類 | | |
| I | ●○○○○ | 一語（コシウトメ（妹）） |
| 第六類 | | |
| I | ○●●●● | 一語（イクビサヽ（久如）） |
| II | ○●●●● | 一語（ウチミダリ（手箱）） |
| III | ○●●●● | 一語（みえがくれ（見隠）） |
| IV | ○●●●● | 一語（ウサギムマ（驢）） |
| 第七類 | | |
| I | ●●●●○ | 一語（イクビサヽ（久如）） |

| | | | |
|---|---|---|---|
| II | ○●●●○ | ○●●●○ | 一語（カラスムギ（穬麦）） |
| III | ○●●●○ | ○●●○○・○●●●○ | 一語（ツバクラメ（燕）） |
| IV | ○●●●○ | ○●●○○ | 五語（例、井知古万女（珂孚豆）） |
| 第八類 | | | |
| I | ○●○○○ | ○●●○○ | 一語（はるかすみ（春霞）） |
| 第九類 | | | |
| I | ○○●●● | ○●●○○ | 四語（例、イキボトケ（神仙）） |
| 第一〇類 | | | |
| I | ○○●●○ | ○●●○○ | 二語（例、ウマツナキ（芽）） |
| II | ○○●●○ | ○●○○○ | 一語（ヒトカサネ（一対）） |
| 第一一類 | | | |
| I | ○○●○○ | ○●●●●・○●●○○ | 一語（アマタヽビ（数箇）） |
| II | ○○●○○ | ○●●○○ | 二語（例、ヤマウツギ（蜀漆）） |
| III | ○○●○○ | ○●○○○ | 一語（由賀太比良（内衣）） |
| 第一二類 | | | |
| I | ○○○●● | ○●●●● | 一語（ヨモツクニ（黄泉）） |
| II | ○○○●● | ○●●●○ | 一語（イクサブネ（艨艟）） |
| III | ○○○●● | ○●●○○・○●●●○ | 一語（ナリビサゴ（瓢）） |
| IV | ○○○●● | ○●●○○ | 三語（例、やまとまひ（大和舞）） |
| 第一三類 | | | |
| I | ○○○●○ | ●○○○○・○●●○○ | 一語（あまつかみ（天神）） |

II ○○○●○ ○●●●● 一語（イクサダチ（軍））
III ○○○●○ ○●●○・○●●●● 一語（あさぼらけ（朝朗））
IV ○○○●○ ○●●●○ 四語（例、ニシキヘミ（蚺））
V ○○○●○ ○●●○○ 四三語（例、イキズタマ（窮鬼））
VI ○○○●○ ○●○○○ 二語（例、ナヽトコロ（七））

第一四類（または○○○○◓または○○○○◓）

I ○○○○● ○●●● 一語（コヽロバセ（景行））
II ○○○○● ○●●●┐・○●●●○・○●●●● 一語（ハカリコト（規））
III ○○○○◒ ○●●●○ 一語（ノホギリバ（鋸牙））
・○○○○● 
IV ○○○○◒ ○●●●○ 一語（比止閇岐沼（単衣））
V ○○○○◓カ ○●●○○・○●●●○ 一語（久太良古度（百済琴））
VI ○○○○● ○●●○○ 一二語（例、アブラカメ（油瓶））

第一五類

I ○○○○○ ○●●● 三語（例、ウツクシビ（媚））
II ○○○○○ ○●●●・○●●●┐ 二語（例、コヽロザシ（志））
III ○○○○○ ○●●●┐・○●●●○・○●●●● 一語（ハカリコト（規））
IV ○○○○○ ○●●○○・○●●●● 一語（ナイガシロ（無））
V ○○○○○ ○●●○○・○●●●┐ 一語（タナゴコロ（躉））
VI ○○○○○ ○●●○○ 一〇語（例、アブミズリ（承鐙））
VII ○○○○○ ○●○○○・○●●○○ 一語（いはひうた（祝歌））

計　一九二語

## 三、東京アクセントの成立

### (一)第一類Ⅰ・第二類Ⅳ・第三類Ⅱ

表1のうち、三語以上が認められる対応関係を取り出すと表2の通りである。全一九二語のうち一四七語、七六・六パーセントの語がこの対応関係に含まれていることになる。多音節語のアクセントの型の対応は複雑であるとされるが、五音節名詞の場合も大筋としてはかなり単純な対応関係が認められると言ってよいように思われる。

（表2）

| | 院政・鎌倉 | 現代東京 | |
|---|---|---|---|
| 第一類Ⅰ | ●●●●● | ○●●●● | 五語 |
| Ⅲ | ●●●●● | ○●○○○ | 四語 |
| 第二類Ⅳ | ●●●●○ | ○●●●○ | 三語 |
| Ⅵ | ●●●●○ | ○●●○○ | 四四語 |
| 第三類Ⅱ | ●●●○○ | ○●●○○ | 七語 |
| 第七類Ⅳ | ○●●●○ | ○●●○○ | 五語 |
| 第九類Ⅰ | ○○●●● | ○●●○○ | 四語 |
| 第一二類Ⅳ | ○○○●● | ○●●○○ | 三語 |
| 第一三類Ⅳ | ○○○●○ | ○●●●○ | 四語 |
| Ⅴ | ○○○●○ | ○●○○○ | 四三語 |
| 第一四類Ⅵ | ○○○○● | ○●●○○ | 一二語 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| 第一五類 I | ○○○○○ | ○●●●● | 三語 |
| VI | ○○○○○ | ○●●○○ | 一〇語 |
| 計 | | | 一四七語 |

この表を見ると、□で囲んだ、第一類I、第二類IV、第三類IIのケース（一五語）については、院政・鎌倉時代の京都方言の、語頭に高が連続する形に、語頭の低下が生じた形が、現代東京アクセントの形であると言える。

(二)第二類VI・第九類I・第一三類V・第一四類VI・第一五類VIと第一類III・第七類IV・第一二類IV・第一三類IV・第一五類I

次に、表2に現代京都アクセントの形を組み込んだ表を作ると、表3の通りである。

（表3）

| | 院政・鎌倉 | 現代京都 | 現代東京 |
|---|---|---|---|
| 第一類 I | ●●●● | ●●●● | ○●●● |
| | ●●●● | ●●●● | ○●●● |
| | ●●●● | ●●●● | ○●●● |
| | ●●●● | ●●●● | ●●●● |
| | | 三語 | |
| | | ●●○○ | ○●●● |
| | | 一語 | |
| | | ― | ○●●● |
| | | 一語 | |
| III | ●●●● | ●●●● | ○●●○ |
| | ●●●● | ●●●● | ○●●○ |
| | | 一語 | |
| | | ●●○○ | ○●●○○ |
| | | 二語 | |
| | | ○○●○○ | ○●●○○ |
| | | 一語 | |
| 第二類 IV | ●●●○ | | |
| | ●●●● | ●●●● | ○●●● |
| | ●●●● | | |
| | ●●●○ | ●●●○ | ○●●● |
| | | 一語 | |

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| VI | ●●●○○ | ●●●●○ | ○●●●● | 二語 |
| | ●●●●● | ●●●●● | ●●●●● | 一語 |
| | ●●●○○ | ●●●○○ | ●●●○○ | 二五語 |
| | ○○●○○ | ○●●○○ | ●●●●○ | 四語 |
| | ― | ― | ― | 一三語 |
| 第三類 II | ●●●○○ | ●●●○○ | ●●●○○ | 五語 |
| | ― | ― | ― | 二語 |
| 第七類 IV | ○●●●○ | ●●●●○ | ●●●●○ | 一語 |
| | ●●●○○ | ●●●○○ | ●●●○○ | 一語 |
| | ○○●○○ | ○●●○○ | ○●●○○ | 三語 |
| 第九類 I | ○○●●● | ●●●○○ | ●●●○○ | 三語 |
| | ― | ― | ― | 一語 |
| 第一二類 IV | ○○○●● | ○○○●● | ○○○●● | 一語 |
| | ― | ― | ― | 二語 |
| 第一三類 IV | ○○○●○ | ●●●●○ | ●●●●○ | 一語 |

| | | | |
|---|---|---|---|
| | | ○○○●○ | 一語 |
| | | ○●●●○ | 二語 |
| | | ○●●●○ | 一語 |
| | | ○●●○○ | 二五語 |
| | | ○●○○○ | 一語 |
| | | ○○●○○ | 五語 |
| | | ○●●○○ | 一一語 |
| V | | ○○○●○ | |
| | | ●●●●● | 一語 |
| | | ●●●○○ | 二五語 |
| | | ●○○○○ | 一語 |
| | | ○○●○○ | 五語 |
| | | ●●●○○ | 一一語 |
| 第一四類 | | ○○○○● | |
| VI | | ○○○○● | |
| | | ●●●●○ | 三語 |
| | | ●●●○○ | 六語 |
| | | ○○○○● | 一語 |
| | | ○●●○○ | 二語 |
| 第一五類 | | ○○○○○ | |
| I | | ○○○○○ | |
| | | ●●●●● | 一語 |
| | | ●●●●○ | 一語 |
| | | ●●●●○ | 一語 |
| | | ●●●●● | 一語 |
| VI | | ○○○○○ | |
| | | ●●●●● | 一語 |
| | | ●●●●○ | 一語 |
| | | ●●●○○ | 三語 |
| | | ●●●○○ | 五語 |

これを見ると、第二類Ⅵ（二五語）・第九類Ⅰ（三語）・第一三類Ⅴ（二五語）・第一四類Ⅵ（六語）・第一五類Ⅵ（三語）の、┆┆で囲んだ例（計六二語）は、現代京都方言の語頭に高が連続する形に語頭の低下が起きた形が現代東京アクセントの形であると言える。語数は少ないけれども、第一類Ⅲ（二語）・第七類Ⅳ（一語）・第一二類Ⅳ（一語）・第一三類Ⅳ（一語）・第一五類Ⅰ（一語）の┆┆で囲んだケース（計六語）も同じ対応関係にある。

このうち、第一三類Ⅴの「ツバヒラカ」「イナビカリ」は、院政・鎌倉時代の形は○○○●○であるが、前者は室町時代に●●●○○の形に転じていたことがわかり（補忘記）、後者は近松浄瑠璃譜本で●●●○○の形に転じていたことがわかる。[3] また、第二類Ⅵの「ヲミナヘシ」は、院政・鎌倉時代の形は●●●●○であるが、『和字大観鈔』で●●●○○に転じていたことがわかる。[4] 他の語については、いつ現代京都方言の形に転じたのか明らかでないが、[5] 院政・鎌倉時代以降現代までの間に転じたものと見られ、現代東京方言の形は、その間に、語頭に高が連続する形に語頭の低下を生じて、出来上がったものではないかと考えられる。

### ㈢その他

この目で見なおしてみると、次の場合にも、現代京都方言の語頭に高が連続する形に語頭の低下が生じた形が現代東京方言の形であるという例が認められる。

| | | | 現代京都方言 | 現代東京方言 |
|---|---|---|---|---|
| 第一類Ⅱ | 一語 | 波太於利米 | ●●●●○ | ○●●●○ |
| 第二類Ⅲ | 一語 | イシダタミ | ●●●○○ | ○●●○○ |
| 第二類Ⅴ | 一語 | ゆふづくよ | ●●●○○ | ○●●●○ |
| | | | | ○●●○○ |

第三類III　一語　ミヅクロヒ　●●○○○　○●○○○
第四類I　二語　ますかがみ　●●●○○　○●●○○
やへむぐら
第八類I　一語　はるかすみ　●●●○○　○●●○○
第一〇類I　一語　ウマツナキ　●●●○○　○●●○○
第一一類II　一語　ヤマウツギ　●●●○○　○●●○○
第一三類III　一語　あさぼらけ　●●●●●　○●●○○
第一四類I　一語　ココロバセ　●●●●●　○●●●●
第一四類IV　一語　比止閇岐沼　●●●●○　○●●●○
第一五類II　一語　イキドホリ　●●●●●　○●●●●
○●●●●」
第一五類IV　一語　ナイガシロ　●●●●●　○●●○○
○●●●●
第一五類V　一語　タナゴヽロ　●●●○○　○●●○○
○●●●●」
第一五類VII　一語　いはひうた　●●●○○　○●○○○
○●●○○
計　一六語

## (四)語頭の低下

院政・鎌倉時代から現代までの間に、京都方言の語頭に高が連続する形に語頭の低下が起きることによって現代東京方言の形ができたという視点で説明することのできる語は九九語認められることになる。

㈠で扱った語　一五語
㈡で扱った語　六八語
㈢で扱った語　一六語
計　九九語

対象とした語が一九二語であるから、約半数しか説明できないことになるが、現代京都方言のアクセントの形が明らかでない語が四六語ある[6]から、一九二からこれを除くと、六七・八パーセントの語がこの視点で説明できることになる。

五音節名詞の東京方言アクセントが、その原形と考えられる京都方言の、語頭に高が連続する形に、語頭の低下が起きて、生じたものと考えてよいとすれば、それが生じた原因は、東京方言アクセントが統成的機能を獲得する方向に変化したからであると考えられる。現代東京方言アクセントは数少ない型に収斂していく一方で、統成的機能を獲得していったのであろう。五音節名詞になれば同音異義語はほとんどなく、統成的機能を果たす形の方が合理的であったと言える。

五音節名詞のアクセントの型（現代東京方言）

○●●●●
○●●●●┐
○●●●○
○●●○○
○●○○○

●○○○○

## 四、○●●●●┐・●○○○○

現代東京方言アクセントに認められる型で、上の考察に出て来なかった型は○●●●●┐と●○○○○とである。○●●●●┐は次の語に実現している。

イキドホリ・ココロザシ・ココロバセ・タケノカハ・タナゴコロ・ハカリコト

このうちはじめの五語は○●●●●の形でも行われている。○●●●●は○●●●●┐の形でも実現しやすい形なのであろう。

次に●○○○○は、「イクビササ」という疑問詞の例と、「あまつかみ」（天つ神）とである。頭高の●○○○○については、四音節名詞・六音節名詞のそれと合わせて、別に扱うこととしたい。

## 五、結　論

動詞に生じたアクセント変化の影響を受けなかった五音節名詞の場合、東京アクセントの形は、大筋としては、院政・鎌倉時代から現代までのいずれかの時期に、統成的機能の獲得を志向して、京都アクセントの、語頭に高が連続する形に、語頭の低下を起こさせることによって、生じたものと説明することができる。

ただ、本稿では、京都方言のアクセントが、院政・鎌倉時代以降、なぜ次のような変化をしたのかということについては説明を試みていない。

| | 院政・鎌倉時代 | 現代京都方言 |
|---|---|---|
| 第一類III | ●●●●● | ●●●○○ |
| 第二類VI | ●●●●○ | ●●●○○ |
| 第七類IV | ○●●●○ | ●●●○○ |
| 第九類I | ○○●●● | ●●●○○ |
| 第一二類IV | ○○○●● | ●●●○○ |
| 第一三類IV | ○○○●○ | ●●●●○ |
| V | ○○○●○ | ●●●○○ |
| 第一四類VI | ○○○○● | ●●●○○ |
| 第一五類I | ○○○○○ | ●●●●● |
| VI | ○○○○○ | ●●●○○ |

なんらかの原因で第二類VIの変化●●●●○→●●●○○が起き、第三類に合流すると、●●●○○の型が多数の語をもつこととなり、少数の語しかもたない型の語がこの型に統合されていったというのが、大きな流れではないかと見られるが、今後の課題である。

## 注

(1) 拙稿「モーラ方言アクセント（京阪式アクセント）・シラビーム性モーラ方言アクセント（東京式アクセント）・シラビーム方言アクセントの分離は、いつ、どのようにして、なぜ生じたか」（愛媛大学教育学部紀要㈡七―二　一九九五・二）同「四音節名詞における東京式アクセント」（築島裕博士古稀記念会『築島裕博士古稀記念国語学論集』　汲古書院　一九九五・一〇）同「四音節名詞における京阪アクセントと現代東京アクセント」（愛媛大学教育学部紀要㈡八―二　一九九六・二）ほか。

(2) 所属する語のすべてを列挙した表を作成しているが、紙幅の都合で省略する。

（3）坂本清恵『近松世話物浄瑠璃　胡麻章付語彙索引体言篇』（アクセント史資料研究会　一九八七・一）による。

（4）稲垣正幸「釈文雄「和字大観鈔」のアクセント」（都留文科大学研究紀要　一九七九・六）による。ただし、同じ第二類Ⅵの「サザレイシ」は、『和字大観鈔』に、古い形の●●●●○のままで見える。

（5）第一三類Ⅴの「モノガタリ」「ハナガタミ」や「ヤマトウタ」の近世の形は、院政・鎌倉時代の形○○○●○から現代京都方言の形●●●○○への変化の中での位置が明らかでない。

（6）第一類Ⅰの「クルマザキ」も京都方言アクセントが示されていないが、院政・鎌倉時代の形から説明できる語であるから、数えていない。